

# 新米と美酒

フィールドは、いつも刺激と感動に満ちている。二〇一九年の初秋、高知県中土佐町の久礼八幡宮の御神穀祭を見学する機会があった。まだ蒸し暑い中、旧暦八月一日の新月から二五日の満月までの長い期間の祭礼次第をよく残している古式豊かな祭りである。とくに注目されたのは、頭屋と頭人が奉納する新米を炊いたご飯に、侘と呼ばれる神聖な少女が神前で生麴を揉みこんで一夜酒を醸す神事であった。

日本の神祭りの基本が稲の祭りであることは、新嘗祭や踐祚大嘗祭をみれば明らかであろう。しかし、日本の稲作の起源からみれば、紀元前一〇世紀半ばに九州北部で始まった稲作が関東地方にまで広まるのは紀元前三世紀頃、その間、約六五〇年もかかった。ただし、稲作が定着した社会では大きな変化が起こった。三世紀半ば、その九州から東北地方南部までの範囲で前方後円墳が一斉に築造され始めたのである。稲作の定着が古代王権を誕生させたのである。

六五〇年もの長きにわたり人びとが嫌悪し抵抗し続けたのに、稲作が定着していったのはなぜか。その謎を解くカギは、古代律令制下の中臣祝詞と

## 新谷 尚紀

プロフィール  
1948年広島県生まれ。国立歴史民俗博物館教授、国立総合研究大学院大学教授等を経て、現在、兩名誉教授、國學院大學大学院客員教授、柳田國男と折口信夫の著作を読み込み、歴史科学としての「民俗伝承学」を提唱し実践している。著書に『神々の原像』『民俗学とは何か』（いずれも吉川弘文館）、『神道入門』（筑摩書房）ほか多数。

春時祭田条の記事にある。収穫した稲の初穂を天皇と神に献納し、農民たちも白飯を食べ白酒を飲んで酔いしれ喜びを分かち合おうというのであった。白飯と白酒の美味に魅了された人たちが、その味が忘れられずに稲作に従事していった姿が想像される。闇夜の中を、大たいまつととも運ばれてきた御神穀が、燃えさかるたいまつととも火の粉が散る中で神前へと運び込まれ、その火の下で少女によつて一夜酒が醸され本殿の奥深くに奉納される。その二日後に直会になぞらえて一口味わたその美味は、私は一生忘れない。稲の収穫を神とともに白飯と白酒の美味で祝い合う基本が、この御神穀祭には保存伝承されている。

古伝祭といえは、島根県松江市の佐太神社の御座替神事でも、火鑽杵と火鑽臼を用いる発火法の古式が伝承されている。長い歴史の変遷の中にも、そのように保存伝承されるものがあるのはなぜか。それは、伝承が世代をつなぐ人たちにとっての存在証明だからである。日本創生の民俗学は folklore ではない。伝承 traditions と変遷 transitions の動態を研究する独自の伝承学 the study of traditions : traditionology なのである。

## 月刊 みんぱく

1月号目次

1	エッセイ 千字文 新米と美酒 新谷 尚紀	10	〇〇してみました世界のフィールド 回族の宣教活動に参加する 奈良 雅史
	<b>特集 世界の縁起モノ</b>	12	みんぱく Information
2	年初めの珍客 八木 百合子	14	想像界の生物相 チベットの占術ダイアグラム 村上 大輔
4	インドの笑う門にも「ラフィング・ブッダ」 福内 千絵	16	みんぱく回遊 茶の旅 韓 敏
5	神と人と二股大根 鳥谷 武史	18	シネ倶楽部 M 月経のタブーに挑む、心優しきヒーロー ——「バッドマン —— 5億人の女性を救った男」 松尾 瑞穂
6	黄土高原に咲く紅紙の花 丹羽 朋子	20	ことぼの迷い道 ゴム時間の危機 小野 林太郎
7	見せて魅せるトルコの祝儀 田村 うらら	21	次号予告・編集後記
8	赤くて丸いクリスマスのチーズ 古沢 ゆりあ		
9	嫉妬にはきつと尻尾が効く 二ツ山 達朗		